

1970年代以降の日本社会（3）

—2つの視点: 〈カプセル人間〉と“Liquid Modernity”—

西脇和彦

1. はじめに

筆者はこれまで拙稿「1970年代以降の日本社会（1）（2）」（『学苑』No.829, 865, 2009.11, 2012.11）において、70年代以降、日本が欠乏からの脱出を目指す近代の第1ステージから、付加価値の充実を継続化する第2ステージ、換言すると、もの（モノ）重視の時代からサービス過剰の時代に突入したこと、そして、その特徴を主として社会集団の中範囲レベルで考察した。それらは、サービス化社会や情報化社会の諸相に見出すことができるが、自然的ものや人工的モノに付加されるサービス価値（たとえば、時間・空間・カラー・安全）、キャラクターやブランド、もの（モノ）離れがさらに進行した情報環境、これらを近代の第2ステージの特徴として指摘した。そこで生活する人々は、絶えざる利便性を追求し、消費者としてパーソナル化の傾向を強く示していた。もの（モノ）は豊饒に存在し、一人ひとりを充足させた。その恩恵から、他者に配慮あるいは遠慮する必要もなくなり、実際、配慮も遠慮もしなくなった。そして、メディアの発達は、情報が権力者や仲介者を経ずに、直接個人に到達することを可能とした。東欧諸国の体制崩壊から振り込め詐欺まで、その事例には事欠かない。必然的に全体を凝集させる共有共存の考え方は後退し、かつての「コミュニケーション二段階の流れ」論は、第1ステージに適合的なキーワードであったことが自明となる。ターゲットを一本釣りする振り込め詐欺やオウム真理教の信者獲得作戦も第2ステージならでのこと、ということになる。宗教社会学者のなかには「学校で学習する宗教はすべて集団がターゲット（信者）である。しかしオウムはそれらと異なり、個人対応で信者を獲得した現代型の宗教である。ただし、その斬新さがアダとなった」とみる向きもある。情報社会とパーソナル化のメリット・デメリットを痛感したのであった。

第2ステージは現在も進行中であり、身近な現象にその特徴があふれている。「灯台下暗し」で見えにくいところも、第1ステージとの比較、あるいは自己再帰性（外部に関連した判断基準ではなく、自分自身の判断が優先すること、特に感性的判断をするところにその特徴がある）やパーソナル化をキーワードにすると、具体的に現出してくる。一見無関係に見える現象も、これらを補助線にすると連動していることがわかる。それらの根本原理が共通しているからである。

本稿ではこの第2ステージを、主に、ミクロの側面からアプローチした中野収（1933-2006）法政大学名誉教授と、マクロ・メゾの側面からアプローチする Zygmunt Bauman（1925-）リーズ大学名誉教授・ワルシャワ大学名誉教授、この両者の議論を中心にまとめたが、その前に、卑近なところで頻発する第2ステージの諸事例を指摘しておきたい。無自覚で、無邪気ではあるが、看過できない問題と考えるからである。

2. 第2ステージの事例群（1980年代後半以降）

2-1 私的空間の肥大化

公私混同は以前から批判の対象であった。ニュースになるような公金横領から、電話をはじめ職場物品の私的利用まで、これらは公私混同に端を発する反社会的行為として批判されてきた。その当事者は、温度差はあるにせよ、自己の行為が犯罪的であることを自覚し、いくらかの後ろめたさを感じていた。ところが、バブル期あたりから、この手の行為主体からその反社会的、犯罪的意識が消え去り、後ろめたさも消失した。さらには、当事者意識も稀薄になっている。他人の傘や自転車を罪悪感なく持ち去り、万引きをゲーム感覚とするようにもなった。また最近では、教室のコンセントを利用した携帯電話の充電も増加中である。どうしてだろう。自我構造から公的部分が欠落したからに相違ない。公的部分を欠損した自我は、必然的に脱社会化する。反社会と脱社会とは、似て非なるものである。反社会は当事者にその意識があるが、脱社会にはその意識が欠けている（あるいは、わかっていない）。現在物議を醸す出来事は、後者の脱社会的行為である。

先日の昼ひなた、一方通行の狭い道路を二人連れの若い女性が出口の方から歩いてきた。声高に会話を夢中、狭いとはいえ道路の中央を歩く傍若無人な二人の世界があった。そこに商用車がやってきた。二人には正面から来る自動車ぐらい視界に入ってよさそうであったが、避ける素振りさえなかった。いくら徐行中とはいえ、相手は自動車である。自動車はいったん停止したが、退いてくれそうもないため、ちょうど道路沿いにあった駐車場に車の右半分を乗り入れ、二人の横を通り抜けて大通りに脱出して行った。筆者はこれまで、歩行者同士のすれ違い時のトラブル事例は知っているつもりであったが、これを目の当たりにした時は驚いた。新聞の読者欄にも、道を譲る人と譲らせる人に歩行者が二分されるとの投書（朝日新聞、2012.7.16付朝刊「声」）があったが、まさか人と車のケースで、いくら歩行者優先とはいえ、件の二人は完全に融合し、不可視ではあるがひとつの共有空間に納まり、自動車の通過を遮る構えがあった。個室やマイカー、あるいは各種のブース、これらはそれ自体が外壁あるいは外枠として可視的であるが、私的空間を庇護的に包み込む外皮には不可視的なものも存在することがわかった。混み合った車内でのトラブルも、見えない外皮をつきやぶった私的空間同士の衝突とその相互侵食に起因する。歩道に限らず廊下でも階段でも、直進するばかりで避けることをしない直進族が増加したし、人の直前を何の挨拶もなく横切る輩も増えた。これらは、私的領域の外側に公的領域が稀薄化あるいは欠如した自我構造の持ち主が増えたことを示している。マナーの欠如問題のみに終始する事象ではない。外部からは「道を譲らない」と見えるが、当人にその意識はなく、ただ「我が道を行く」感覚なのではなかろうか。これは生活空間から公的側面が欠落したことを物語っている。他者との関係を調整するクッション部分が摩耗している。そもそも自我構造に、公的空間の意識が内面化されているのか、きわめて曖昧になった。

80年代後半、ちょうどバブルの時代から、公衆の面前で喉頭部まで見えるほどの大あくびをする人、街頭や車中で懇ろなカップル、それに乗り物のなかでお化粧する人が顕著になった。傍若無人な彼らの周囲には不可視ながら、ある種の遮断幕があるかのようである。これらは〈カプセル人間〉の一種である。ちなみに、車中でお化粧する女性のなかで筆者が最も感心（寒心）したケースは、ヘアセット10分+メイク5分=15分のケースで、車両端の連結部近く、消火器収納箱の上平面に、ヘアブラシ・ピン・ヘアバンドを置き、立ったまま、どこにもつかまらず、窓を見ながら髪をとか

し、そして束ねる行為を混雑した車内で繰り返していた。地下鉄では窓が鏡の役割を果たすのだが、顔のメイクはコンパクトを使用した普通のやり方であった。それは手馴れた見事なものであった。彼女はメーキャップ終了後、次の駅で平然と下車していったが、周囲の乗客はただ啞然とするばかりであった。

先述した傘や自転車の盗難についても、所有者に断りなく使用すれば窃盗であるという意識がきわめて薄い。目の前にあり、私的空間に入るならば、それらはすべて、自己の所有物と錯覚するらしい。このタイプの人間に金銭や本を貸したら最後、回収はかなりむずかしい。これもまた、自己再帰性の実例である。社会学部の社会学専攻の学生でも、視野が狭くなり、まるで半径5メートルぐらいの範囲しか関心がないようだという話も聞く。社会圏が狭隘化している。新聞を読まない人が増えたことも、この自己再帰性と不可分である。

2-2 漢字の感字化

学生のレポートや答案のみならず、書籍類、時には新聞でさえも、この20年ほどで、漢字表記が変容したケースがある。もっとも顕著なケースが「価値観」から「価値感」となったことである。以前筆者がコーディネーターをした授業で、事前に講演者のテーマを板書したことがある。事前に渡されたメモには「価値感」とあり、講演者の年齢からすると「価値観」ではないかと一瞬迷ったが、確認する時間もなく、メモ通り「価値感」と板書したのであった。しかし、講演者は板書をご覧になるやすぐに誤記を指摘された。この場合、講演者が第1ステージに基づいた「価値観」の信奉者であったことは間違いないが、時すでに第2ステージの「価値感」が流布する時代となっており、講演者も筆者もともに両者のマージナルに位置していたことになる。不変不易よりも可変流行に親和性がある時代の到来とも考えられる。時を同じくして、「転石苔を生ぜず」の解釈も変化を肯定するそれへと転化した。変化することは新鮮で望ましく、苔はポジティブな意味からネガティブなそれへと変容した。解釈もまた、表層化したのである。

また、誤字で終わらすには惜しいケースもある。講義が講議に、最低が最底に、集合が衆合に、編入が偏入に、訪問が訪門に、専門が專問に、洗剤が洗材（罪）に、興味津津が興味深深に、雲散霧消が運散無消（少）…というわけである。誤字とはいえ、失笑を誘い、「これもあり」と見えてくるから不思議である。発音が同一のせいもあるだろう。「新年明けまして」や「ぜんぜんいい」のように、使用頻度が高まれば承認されていく。近年の熟語の意味理解は表層的で浅く、感覚的であることは確かである。判断基準が即物的あるいは即時的で卑近にある。社会学では、判断基準が外部より自己内部に起因する傾向を自己再帰性というが、前提にある客体、すなわち他者や対象の把握にはそれほど関心がなく、経緯を調べ比較検討する視点をもたないと、必然的に視野が狭くなり主観性を帯びてくる。新聞や書物を読まない傾向も、自己再帰性の一側面といえるだろう。豊かな社会では自由に最大価値を認めるが、この自由は拘束状態からの解放を意味するものではなく、第2ステージでは自己再帰的自由にまで昇華している。前者、拘束からの解放的自由はもちろん第1ステージに帰属し、be free from で表記される from 以下の社会問題（たとえば、差別・貧困・不平等）が明確であるだけに理解しやすい。これに対し第2ステージでは、from 以下の状態が改善あるいは克服されて削除されるため、be free で停止する。そのため、主体のみの判断基準が前面に押し出され、自己再帰性は第2ステージ必然の帰結ということになる。

2-3 新語形成の時代背景

岩波書店の『広辞苑』を使用して流行語を検索することも、背景にある時代状況が浮かび上がり興味を引く。『広辞苑』といっても各版により採録されることばに違いがある。広く社会で諒解され使用されるに至って掲載されるので、掲載前と掲載後の版が確認できれば、その間に流行し定着するようになったとみなすことができる。このような視座から2つの新語を取り上げてみたい。

まず「新人類」であるが、この新語は第3版までは登場せず、第4版以降掲載されている。第3版は1983年12月の刊行、第4版は1991年11月の刊行であるから、まさにバブル期に訴求力を発揮したタームといえよう。第6版の現在まで、「従来なかった新しい感性や価値観をもつ若い世代を異人種のようにいう語。1980年代後半から広まった。」との定義が継承されている。まさに「新人類」は、80年代前半に成人となり、バブル期の全盛を担った世代に適合的なタームということができる。

同様に、「ださい（ダサイ）」も1980年代後半のバブル期に増幅され一般化したことばである。これも『広辞苑』の第3版までにはなく、第4版以降に登場するタームである。「野暮ったい、洗練されていない意を表す俗語。」と説明されているが、たぶんにアンチ生産社会のムードのなかで、消費的スマートさが優先する社会から排除するためにつけられたスティグマが「ださい」であった。感覚的、表層的、スピーディーをモットーとする消費型の社会や文化が席卷し、その対極にあるものを見下し、否定するときの形容詞が「ださい」に他ならない。比喩的に述べると、イソップ物語に登場するアリはダサく、キリギリスはスマートということになる。

こうしてみると、1980年代後半以降、第2ステージの特徴がミクロレベルでもマクロレベルでも発現していたことがわかる。そこでさらに、1980年代前半にまで遡及し、この時点で新しい動向、変容に気がついていた先人の事例をみる。

3. 第2ステージの先人例（1980年代前半）

3-1 『なんとなく、クリスタル』（河出書房新社、1981年、田中康夫）

1980年12月号『文藝』に掲載され、翌年1月に単行本で出版されたこの小説は、風俗小説として賛否両論を巻き起こした。斬新でユニークなところを評価するのか、あるいは、ブランドを解説した小説とみなし、内面的軽さゆえに否定的に見るかであった。筆者は、時代の先端を活写し、ブランド名が飛びかい、消費文化を色濃く反映したところに、この作品の価値があると考え、「バブルのさきがけ」と評価している。

主人公である女子大生の心情吐露、たとえば、「無意識のうちに、なんとなく気分のいい方を選んでみると、今の私の生活になっていた。」（1981年単行本、河出書房新社、4版、p.40）、あるいは、「おたがいに、別々の世界を持ちながらも、一緒に住んでいる私たちには、共棲という言葉の方が似合っていた。」（同書、pp.118-119）、これらにはイメージ優先のいかにもフィーリング世代に適合的な、明朗さや軽快さが表出している。そして、主人公の共棲相手も「僕らって、青春とはなにか！ 恋愛とはなにか！ なんて、哲学少年みたいに考えたことってないじゃない？ 本もあんまし読んでないし、バカみたいになって一つのことに熱中することもないと思わない？ でも、頭の中は空っぽでもないし、曇ってもいないよね。醒め切っているわけでもないし、湿った感じじゃもちろんないし。それに、人の意見をそのまま鵜呑みにするほど、単純でもないしさ。」（同書、pp.87-88）といっている。生活感覚が似ているこの二人だからこそ、「同棲ではなく共棲」ができる。先行世代の同棲が帯びる後ろ

めたいニュアンスは微塵もなく、ここには、透き通ったクリスタルな二人用のカプセルが存在するのである。そして、これから二人で新しいものを作るというよりも、二人で最大限の消費を享受するのである。「共棲」には生産的ニュアンスが稀薄である。賛否は別にして、こうした生き方も豊かな社会では可能ということである。この先 DINKs まではもう一歩、至近距離にある。ちなみに、DINKs は『広辞苑』第 5 版（1998 年刊行）から掲載されたことばで、第 4 版までは見当たらない。すなわち、新人類同士が結婚すると、その後、このような選択肢も可能ということである。

作者は主人公世代より上の世代に属するが、このような「新人類」の存在に気がついてはいた。現に同書の河出文庫版「著者ノート」では、「豊かな日本に育ってきた世代が、気分よく暮らすことを、生活のメジャーにしている現象」や「感覚で行動する世代が登場していることを」描いてみたい（1983 年、p. 230）といい、新潮文庫版のあとがきには、「皮膚感覚を頼りに行動する、今の若者たちが登場する小説を書きたい」という表明がある（2002 年 14 刷、p. 223）。「気分」や「皮膚感覚」を共有する男女が一緒に生活をすれば、「共棲」という結婚になるのであろうが、データ上も 1980 年以降、婚姻率は急下降し、離婚率は反対に急上昇した（表 1 参照）。多様化する社会では、必然的に共有の可能性は低下し、分離の可能性が高まる。結婚の意味も変容しだし、絶対的なものではなくなる。そして家族形成のスタートである結婚が変容すれば、その後の家族がライフステージにおいて変容することも、また必然である。核分裂家族も、その一例であるが、家族のなかにカプセルが複数形成される場合もあれば、個家族となる場合もある。さらには、家族内離婚も、夫婦別室（別寝）も、引きこもりも、虐待も、何でもあり状態を生じる可能性ないしは危険性（リスク）が第 2 ステージには内包されている。消費社会におけるパーソナル化、自由化、自己再帰性が強く作用する第 2 ステージならではのことである。家族の深層に來たし始めた異変に注目した先人がいたのである。

表 1 婚姻率と離婚率の推移: 各年代とも 10 年間の平均値

年代	人口 1000 につき	婚姻率 (%)	離婚率 (%)
1960s		9.6	0.8
1970s		8.7	1.1
1980s		6.2	1.4
1990s		6.2	1.6
2000s		5.9	2.1

総務省統計局 編集 総務省統計研修所『日本の統計 2013 年版』平成 25 年、p. 24 のデータをもとに筆者作成

3-2 『家族ゲーム』（本間洋平）

1982 年に刊行された『家族ゲーム』（集英社）は、都会の団地で暮らす両親と兄弟、4 人家族の物語である。外見的には典型的な核家族と見えるが、その実、夫婦間、親子間、兄弟間にコミュニケーション不全があり、弟の高校受験を契機に、それまでの平穏無事な日常生活が実は表面的なもので、その家族の事なかれ主義を弟についた家庭教師が逐次暴露していくというストーリーであった。一緒に暮らしていても、すべて一心同体ではないこと、それぞれが異なることを考えていること、家族内で各自の役割を遂行しているように見えながら実はうわべだけであること、各自が自分固有（プロバ

ー)の世界をもっていること…これらがさりげなく活写されていた。この家族像を映像化したのが森田芳光監督(1950-2011)であった。彼は、この家族関係を食事風景に見事に象徴化させ、具体的に描写してみせた。全員が長テーブルに横一列、すなわち、カウンター方式に並んで座るという配置である。テーブルがあれば、通常はテーブルを囲むとか、全員ではないにしろ、対面あるいは斜めに座るであろう。しかし、この家族ではそれがない。母親は専業主婦と設定されている。しかし、食事の仕度は担当するものの、食事のお給仕は一切しない。各人が自分で賄う。この作品は原作よりも映画化されて有名になったが、指摘したシーンは今日では日常的でそれほど驚くに値しない。日本では核家族から、核分裂家族となって久しいからである。すなわち、この時代からは家族にあってもパーソナル化が進行し、核家族は家族の最小ユニットではなくなり、多様な家族形態の1つと化している。この作品の家族は食事を一緒にとっているところだけは旧時代的で、時代は核分裂家族さらには個家族への入口を迎えていた。「おふくろの味」が残っていた最後の時代で、それに代わる「お袋(レトルト食品)の味」がすぐそこまで忍び寄っていた。サービス化、冷凍食品と電子レンジの普及(表2参照)が家事労働の軽減に大きく貢献することになる。レトルト食品はその象徴である。サービス化社会はパーソナル化や簡便化を促進する。食生活における従来の共食は後退し、個食や孤食へとシフトするが、この初期段階で、家族変容にともなう違和感に気がついた鋭敏な人たちが存在したのである。

表2 冷凍食品と電子レンジの普及

西暦(年)	国民1人当り消費量*(kg)	電子レンジの世帯普及率**(%)
1970	1.4	2.1
1975	3.4	15.8
1980	6.0	33.6
1985	7.9	42.8
1990	10.8	69.7
1995	15.2	87.2
2000	18.7	94.0

* 冷凍食品の年間国内消費量の推移(一般社団法人日本冷凍食品協会調べ):同協会のホームページから引用

** 編集 内閣府『平成19年版国民生活白書』2007, p.264「主な耐久消費財などの普及率の推移」から引用

3-3 『たんぼぼさんの詩^{うた}④』(アクションコミックス, 双葉社, 2001年, 西岸良平)

祥伝社の女性週刊誌『微笑』に掲載されたこのシリーズは、その後、『たんぼぼさんの詩』(双葉社, 全5巻)として単行本化された。そのなかに、「みんなでゲーム」という1983年正月の一日を描いた作品がある。これは、たんぼぼさん(主人公)一家の一人娘、スマレのところに友だちが来て、スマレの部屋で遊ぶ話である(第4巻, pp.16-19, 2001年)。子ども部屋におやつを運んだたんぼぼさんは、そこで、銘々が別々のゲーム機に興じる姿を見てショックを受ける。「せっかくお友だちが来ても一人で遊んでると同じじゃないの。トランプでもやって みんなで一緒に遊べばいいのに」という。まさに、個遊時代の到来である。空間を共有していても、同じことをしているとは限らない。この話

では、最後に、全員で福笑いに興じて一件落着となったが、すでにこの時代から、個室、個食（席には一緒につくものの、各人が好みの惣菜を選んで摂る）、個読（同一テーブルについても、一緒に会話をするわけではなく、各人が別々に新聞雑誌書籍を読むこと）、個聴（個食や個読のバリエーション）、個浴（共同浴場であっても、素知らぬ顔で距離を置いて入浴すること—西脇）といった現象があり、同一空間にあってもパーソナル化が優先し、自己再帰性が強く作用している。

筆者は80年代、温泉の洗い場で立ったまま上がり湯をかけた中年男性を見て驚愕したことがある。男性の両側のカランが空いていたとはいえ、しぶきがあたり一面に飛散し、湯船に浸かっていた筆者の顔面にも降りかかった。マナー知らずの男性であったが、彼は身体を拡張した自己空間ごとに入浴しているようであった。この空間は私的空間で、外側にある公的部分を完全に遮断していた。内風呂の感覚しかないのであろう。比喩的に述べると、マイカーという空間の内側にあって、自分だけが解放されているイメージである。外部の公的空間を考慮しないマイカーは暴走車となるが、件の男性は暴走者であった。このようにカプセル人間の弱点は、社会性・公共性に弱いこと、ないしはその欠如にある。公的領域や他者への関心はきわめて稀薄で、必然的に社会的視野も狭い。情報を駆使している割には、気分が乗ったときしか報道系の情報に関心を示さない。従来の公私を内面化した二重の自我構造とは明らかに異なるタイプである。しかし、賛否は別として、こうした自我構造も存在可能であり、自我構造のバリエーションを考慮する必要があるということである。豊かな社会では、自我構造の私的領域が拡張され、公的領域は縮小、あるいは、消滅の危機にさえある。そのような自我構造は、当事者として社会と関係するとき、思わぬ弱点をさらけ出す。対処法をもたずに社会問題となってはじめて、自我構造の外側にあるべき公的領域の存在とその重要性に気づくことになるが、後の祭りとなることが多い。

1980年代の前半は、こうした傾向に対してまだ幾分かの歯止めは作用していたと考えられる。しかし、その後の経緯は、80年代後半以降に見られた通りである。

4. 社会的性格としての「カプセル人間」・「異星人」・「新人類」（中野収—理論化の試み）

日本社会の第2ステージ化を1970年代からいち早く察知し、その生態と人格構造のモデル化に着手した研究者が、中野収法政大学名誉教授であった。その考察は、いわゆる興味本位あるいは一過性や単発性のものではなく、最終的には、メディア人間（多分に新人類的）を中枢に据えたコミュニケーションの総過程、すなわち、従来のコミュニケーション論の革新を構想することに繋がった。すなわち、情報社会、情報環境にあっては、主客の設定が流動的あるいは溶解的になり、メディア人間が時代の寵児となることを早くから喝破された。これが21世紀型の人間像であった。今でこそ理解できるが、第1ステージのコミュニケーション論とその前提にある人間像を、いち早く第2ステージの視座で考察された。本稿では、氏の膨大な著作のなかから、先ずこの視座の基礎的、下部構造を確認することにしたい。

4-1 『コピー体験の文化』（平野秀秋法政大学名誉教授との共著、時事通信社、1975年）

人間関係のあり方が従来と変わりつつある。Face-to-faceなのに、何かよそよそしい。直接的であるのに他者感覚で間接化している。時間が経っても打ち解けない。お酒を飲まなくなったし、マージャンもしなくなった。70年代、氏はゼミの時間や研究室でこのようなことを幾度となく指摘された

が、今思えば、これらは第2ステージの予兆であった。

同書にあるように、当初は「変化の知覚を率直に受け止めて試行錯誤をしてみること」(p.3)からスタートしたが、情報の環境化のみならず、環境の情報化を見抜いたところが先駆的であった。これにより、「受け手に、ある主体性と自由が与えられる」(p.72)からであった。前者からは、周囲に同調的な、消極的な、受動的な人間像がイメージされる。しかし、私たちは画一的な存在ではない。自ら発信したり、変換したり、アレンジすることもできる。差異にも敏感である。マス・コミュニケーション論や大衆社会論が全盛の時代に、次の時代を見越した人間像を予測されたのであった。後年気がついたが、先生は常に「正-反-合」の弁証法的発想をする方で、視野が広く、近未来の予測ができたわけである。当時前提視されていた人間像(たとえば、D.リースマンがモデル化した内部志向型人間と他人志向型人間)にプロテストして構築した人間像が〈カプセル人間〉であったが、この〈カプセル人間〉も弁証法的存在の事例である。

そして、〈カプセル人間〉を「自我がなにかですっぽり包まれているという側面と、個人間の結合の仕方が、裸の自我の衝突・結合でなく、何らかの媒体を間において結びついている状態」(p.75)と定義したのであった。また、この新しいパーソナリティをリースマンの〈内部志向型〉人間や〈他人志向型〉人間と比較して、「〈カプセル人間〉は、〈他人志向型〉とは違って、人格の内部に内的権威をもっている。この点では〈内部志向型〉に似ている。かつての内的権威は、人格に独自性・主体性・自律性を付与し、いわゆる近代的自我=個性の源泉になったが、〈カプセル人間〉では、内的権威は、自我を他者と峻別する作用をもたない。つまり、求心性と遠心性が微妙に均衡し、独立した自我同士が、同質化して、相互に結合している」(p.307)と判断したのであった。そして、カプセルが自我の防護壁となり、フィルター作用を果たすとも見たのであった。フィルターはろ過装置であるから、ある種の「増幅であり、取捨選択であり、情報の内的構造の組みかえであり、価値関係の転倒である。またこの装置は、固有の波長をもった情報を発信する。この波長に同調できるのは、(中略)同じようなフィルター装置だけである」(p.77)となる。

〈カプセル人間〉は、内部志向型と他者志向型を止揚したハイブリッド・タイプで、第2ステージの人間像として最適モデルと考えられる。新しい諸現象を明瞭に説明することができるからである。

4-2 『まるで^{エイリアン}異星人—現代若者考—』(有斐閣, 1985年)

この新しいタイプの個人主義について、著者は「内面を支配しているのは、神でもなければ理性でもない。『カッコイイ』『ダサイ』ということばが象徴する極めて主観的な皮膚感覚的美意識(別名フィーリング)と、『ムカつく』『ユルセナイ』ということばが示している極私的倫理意識と、自愛と自虐を同時に含む心理的ベクトルと、純化された欲望自然主義とが、この新しい個人主義の原理になる。したがって他者意識、社会性、共同主観性は形成されがたい。孤立したからとてなんの不思議もない。」(同書, p.12)と断言する。これは、伝統的な近代型個人主義とは一線を画する個人主義で、従来の個人主義を標榜する側から見ると、あたかも異星人に見えてしまうのであった。社会規範によるコントロールが機能しない事例、約束を反故にしても平然としている事例、刹那的で自己の欲望には忠実な事例…枚挙に遑がない。

〈カプセル人間〉は、消費財に囲まれて生活するためナルシストでもある。消費型のパーソナリティを帯びているため、集団的行動を苦手とする。これは、第1ステージの近代的自我とは異なるパー

スナリティである。近現代でも、第2ステージ、ポストモダンの人間類型というにふさわしい (p. 198)。そして、パーソナル化と並行し、自己再帰性が強化されると、〈カプセル人間〉はさらに純化し、孤立・自閉・幼稚化することになる (p. 208)。必然というべきである。また、同書に、近頃の新学期最初の講義で学生の無表情・無反応に『歓迎』されるという指摘 (p. 164) があるが、過度なパーソナル化には他者とのコミュニケーション不全をおこす危険性が存在する。他者との関わりが減少することにより、人間性が変質する危険性がある。他者との関係性が稀薄化すればするほど、人間は人間性を喪失する。感情を喪失し無表情にならざるを得ない。先述の電車の中で化粧する女性もそうであったが、その象徴的事例が、かつて、岡本太郎が大阪万国博覧会 (1970年) のために制作した『太陽の塔』の裏面の顔 (第3の顔、黒い太陽) であった。この第3の顔については、彼がテレビ・インタビューのなかで、「近代を究極まで推し進めていくと必然的に矛盾が出現することになるから、そのときの人間の顔を塔の裏面に描いておいた。いつの日か、誰かがそれに気づくであろう。そして、私がこの塔で近代を越えるそれ以上のものをめざしたことも…」と述べたことを筆者は思い出す。当時は何のことか理解できず、忘れかけていた話であったが、昨今先進国に多発する Alexithymia の症状と同一ではなからうか。第3の顔は、Alexithymia 症患者の顔がモチーフになっている。対人関係が欠損した自己再帰性の究極の表情がこれである。他者には、その人の無表情・無反応・無気味さしか伝わらないが、本人の深層には恐ろしいまでの感情が沈潜している。このタイプでは、集団性の欠如あるいは稀薄化による、他者に対する配慮不足、コミュニケーション能力の弱体化、表現力の稚拙さがその特徴である。端的に言って、集団のなかでの自己のスタンスがまるでわかっていない。一見すると静かで控えめに見えるが、これは経験不足から、他者との付き合い方を知らず、自信がないことに起因する。しかし、いったん自己空間が侵害されると、思いもよらない言動を引き起こす。集団のなかで、ストレス耐性が訓練され内面化されるという経験がないからである。そこで、周囲には考えられない想定外の逸脱的反応を生じてしまう。感情的、非合理的反応であり、俗語でいう「きれる」状態に突然変身する。無表情・無反応は、人間諸関係からの孤立者に多く見られ、老若男女、年代には関係なく、第2ステージでの今後の増加が危惧される。現に幼児教育の従事者から、「クラスのみなどと一緒に行動することの出来ない子どもが急増している」と聞いたことがある。ひとり静かに遊び、一見するといいい子に見えるが、〈カプセル人間〉の予備軍と考えると末恐ろしくもある。集団に対してアンチの反社会と集団から逸脱した脱社会とは、似て非なるものである。今後両者を峻別し、それぞれの対応策を考慮することが急務である。

4-3 『新人類語—異人種を迎えるビジネスマンのために—』 (ゴマセレクト, ごま書房, 1986年)

新人類は、突然変異によるものではなく、近代化路線に誕生した時代の産物である。「社会の産業化、民主化、自由化、平等化、ひっくるめていえば近代化の必然的な産物」(同書, p. 12) なのである。すなわち、近代の第1ステージを母胎として誕生し、さらにそこから進化した人間タイプということができる。進行する消費社会とパーソナル化の影響を強く受けている。したがって、集団や他者に対してスタンスをとり、間接化・相対化するところに特徴がある。旧人類側からは、他人事のような言動が目につき、受動的で当事者意識が不足しているようにも見える。この事例として、筆者は最近、中学生の息子の運動会で、驚くべき光景を目の当たりにした。男子生徒が障害物競走でハードルに腹部をぶつけ倒れたときのことである。同一レースの仲間がゴールしても彼は倒れたままであった。ハ

ードルに下半身がはさまり起き上がれなかった。近くの保護者席から見ていた筆者や周囲の観客は背筋が凍った。この時、倒れた生徒のすぐ近くに控えていた器具係りの若い男性の先生は、倒れた生徒のもとには駆けつけなかった。最初に走り寄ったのは、離れたところにいた年配の先生であった。それに引きずられるように、若い先生も近寄りはしたが、年配の先生が大声で「担架、担架」と救護係を呼んだ。その後、救急車も要請したのであったが、他の生徒や保護者には心配する気配がほとんど感じられなかった。なんというクールさ、落ち着きだろう。一部の先生が必死に動き廻っていただけであった。後日聞いたのは、「倒れた男子生徒は普段からよくふざけていたから」というものであったが、何かがおかしい。筆者がこの出来事に関心をもったのは、当事者意識の欠如がまん延していたことである。映像のなかのワンシーンを見ている感覚といえよいだろうか。まさに、このケースではほんの一部の人しか環境（オリジナル）に反応していない。大多数の人は情報環境（コピー）の1コマとしてしか受け止めなかった。2007年頃、「そんなの関係ねえ！」というギャグがはやったことがある。当事者意識の欠如は、モラトリアム意識との親和性も指摘できる。社会的責務から猶予される期間がモラトリアムと定義され、かつては青年期のことであった。ところが、モラトリアム意識はいまやあらゆる世代に拡張し、青年期に固有なタームではなくなった。『広辞苑』でも第4版（1991年）からは、青年期が削除された。ここでもまた、第3版と第4版との間に位相の違いを認めざるを得ない。80年代以降は、完全に第2ステージの時代となったのである。モラトリアムは大人になる準備期間だけでなく、どの年代にも通底する自己再帰的存在（自己目的存在）となった。コミック『あたしンち』（けら・えいこ）の登場人物の常套句「いいんじゃない〜い」にも、冷やかな自己防衛的ニュアンスが充満している。そこで、稀に強い当事者意識と責任感、自己犠牲の精神を開示されると、多くの現代人は内心忸怩たる思いを抱くのである。

集団性の稀薄化は、自由の温床でもあるが、その帰結は自己責任に終始する。これも、自己再帰性の一例である。よくも悪しくも、自己再帰的な時代ということになる。「価値が多元化し、社会的権威が失墜し、規範が弛緩し、役割が不安定になると、個体間の距離を外的に規定し決定する根拠が失われる」（p.163）。そして、「私的な空間を偏愛する新人類には、わずかでも集団性・共同性を含む行動は、苦痛に満ちた大人の世界に属している。」（p.135）ということになる。新人類はカプセルのなかから、自己防衛的に、モラトリアム的に、自己再帰的に、その特徴を随所に表出しながら、今日もあたりの様子を窺いながら棲息する。新人類とは〈カプセル人間〉の異名にほかならない。

4-4 『会社^{エイリアン}に異星人がやって来た！ [新人類現象を読む]』（講談社、1987年）

高度成長以降のサービス化社会、情報化社会は、高度消費社会を生活者にもたらした。快適さや利便性の追求はとどまるところを知らない。さらなる生活の向上をはかりたい。ニーズの充足と創造、この無限連鎖は果てることがない。「足るを知る」や「腹八分目」は死語化した。進行する情報の環境化と環境の情報化、そこにパーソナル化が強く作用するとき、一致を暗黙の前提としたこれまでのコミュニケーション論は盲点をさらけ出す。多様化社会では、ディス・コミュニケーションがまず前提にあるべきではないか。エイリアンはその覚醒を促す誇張したネーミングである。環境との相互性を起点とした人間論が、中野社会学の中枢にある。そこでキーとなる人間論は、メディア型の間人、メディア人間であった。ホモ・サピエンスもホモ・ファーベルも、メディアを人間の外側にあるものとして把握するが、これに対し、このメディア人間はメディアと人間を一体化して把握する。特に自

我構造の外皮，つまりカプセル部分にメディアが装着されていると考えると理解しやすい。情報環境のなかで生育してきた世代が，こうした自我構造となるのは論理的必然かもしれない。この世代が学校を卒業し，職場に本格的に参入するとき，受け入れ側には衝撃が走るはずである。そこで，次のようなアドバイスがなされる。「『新人類』を受け入れている企業や大学は，こういう『異人』を相手にしている，と思ったほうがいい。実際，そういう感想をもらす企業人・大学人が，すでに少なからずいる。彼らとどうつきあっていくか——も，こうした認識を前提にはじめて可能なはずである。」（同書，pp. 228-229）そして，「勉強しない，本を読まない，本を読めない，論理的な思考ができない，集中力がない，根気が続かない，競争心がない……ののないないづくし」（p. 174）の旧人類的評価で終わらせては進歩がない。この新しい人間タイプについて，「これは，個人の存在の仕方の新しいスタイルです。お互いの存在を最大限尊重しあい，かつみずからの自律性を最大限守る，そのために，人格間に常に一定の心理的・精神的距離を維持しておく」（p. 187）として，彼らの絶妙な距離感覚を評価し，この平衡感覚を理解することが，〈カプセル人間〉=新人類=異星人との関係構築のキー・ポイントであると判断したのであった。この視座は，多様化した現代社会，グローバル社会の黎明期を飾るにふさわしいものであった。この心理的・精神的距離を保全することが，人間関係をはじめ諸関係構築の必要条件となったのである。

5. Zygmunt Bauman の現代社会論

欠乏から脱出した先進国では，豊かな社会の恩恵を享受し自由を満喫することが可能となった。しかし意に反して，諸矛盾が発生するようにもなった。この諸問題と格闘する現代社会学であるが，その先陣をきる1人である Z. Bauman は，高度消費社会に拡大深化するパーソナル化，そして，消費によって自己のアイデンティティを確立しようとする現代人を批判的に考察する。また，そこにグローバル化と情報化が重層作用し，多様化と変化の速さが著しい現代社会を，liquid（液状化，流動的）society と呼んだのであった。この社会への適者生存には終わりなき自己啓発が必須となり，その成否は自己責任に帰すのである。厳しい内容であるが，現代人にとって自己啓発は不可避的な生涯の課題である。

そこで，彼の論理を2つの著作を援用し考察してみたい。既存の論理へのアンチテーゼが見られ，現代社会論のパイオニア性と，第2ステージでキーとなる概念の要旨を確認することができるからである。

5-1 “Liquid Modernity”，Polity, 2000

著者はこの作品において，liquid modernity，すなわち，近代の第2ステージの特徴をliquid（流動的・流体的・液状化・不安定）というキー概念を用いて概説する。したがって，ここではそのポイントを示し，論理の概要を把握したい。

まず，第1ステージと第2ステージの相違を簡潔に述べている。それは，インフラ整備に象徴されるハードウェアとサービスや情報の流布に象徴されるソフトウェアの相違ということになる。彼は，前者を heavy modernity，後者を light modernity とも呼んでいるが（ibid. p. 113），両者を比較説明するため，次のキーワードも用いている。それらをピックアップしてみよう（p. 25）。

Heavy modernity: solid/condensed/systemic

Light modernity: fluid/liquid/liquefied/diffuse/capillary/network-like

本書には第2ステージにある現代社会の基本的特徴（流体的・分散的・ネットワーク的）が記載されているが、全体的基調としては辛口の批判的コメントである。この基本的特徴が引き起こす3事例をあげてみたい。

[個人責任]

Ours is, as a result, an individualized, privatized version of modernity, with the burden of pattern-weaving and the responsibility for failure falling primarily on the individual's shoulders. (pp. 7-8)

私たちが直面する近代とは、つまるところ、個人主義的、私的なもので、そこに織り込まれた重荷やおかした失敗の責任は、まずはその個人の双肩にのしかかる。(以下、英文に続く訳文は西脇の意識による)

[消費中心の生活]

Life organized around consumption, on the other hand, must do without norms: it is guided by seduction, ever rising desires and volatile wishes—no longer by normative regulation. (p. 76)

消費を核に展開する生活は、生産を核とするそれとは異なり、規範を欠いてなされる。その生活は、誘惑や増大する欲望、移り気な願望に導かれるのであり、もはや、規範的規則性によるのではない。

[人的絆の崩壊]

The disintegration of the social network, the falling apart of effective agencies of collective action is often noted with a good deal of anxiety and bewailed as the unanticipated 'side effect' of the new lightness and fluidity of the increasingly mobile, slippery, shifty, evasive and fugitive power. (p. 14)

社会的ネットワークの崩壊、集団行動力の低下は、しばしば、かなりの不安をもって指摘され、増大する移動的、不安定で不確実な、回避的で一時的な影響力をもつ新しい軽量性と流動性の想定外の「副作用」として批判される。

There is, though, one more link between the 'consumerization' of a precarious world and the disintegration of human bonds. Unlike production, consumption is a lonely activity, endemically and irredeemably lonely, even at such moments as it is conducted in company with others. (p. 165)

不安定な世界の「消費化」と人的絆の崩壊との間には、もう一つの関連がある。消費は生産と異なり、孤独な活動である。たとえ他の人たちと一緒になされたとしても、本質的根本上に孤独である。

第2ステージでは、パーソナル化、多様化、消費生活が時代のトレンドとなるが、公私を問わず諸規制が次々に撤廃解消され、個々人の自由度が増すというプラス面に対し、その反動が生じることも事実である。消費社会における選択の自由は、その反面、選択した個人の責任を強調する。当然のことながら、自由と責任は表裏の関係にある。パーソナル化は組織や集団の細分化を促進し、集団力の低下をもたらす。第2ステージは多様化した社会であり、同質化を指向する第1ステージとは方向が異なる。しかし、その認識はいまだ充分にはなされていない。さらに彼は、ベシミスティックに第2ステージのマイナス面を警鐘をこめて考察する。その作品が次の著作である。

5-2 “The Individualized Society”, Polity, 2001

本稿では、現代社会の特徴として、パーソナル化、〈カプセル人間〉、消費生活、自己再帰性などを取り上げたが、なかでも、パーソナル化は、時代トレンドとして強力な影響力をもっている。Baumanもこのトレンドに着目し、細分化されていくプロセスの individualization（個人主義化）を重視する。そして、次のように説明する。

‘Individualization’ now means something very different from what it meant a hundred years ago and what it conveyed in the early times of the modern era—the times of the extolled ‘emancipation’ of humans from the tightly knit web of communal dependency, surveillance and enforcement. (p. 45)

現在の「個人主義化」は、100年前、近代初期に意味していたものとは、かなり異なっている。すなわち、共同体での従属性や監視、強要といったがんじがらめの人間関係からの解放を謳ったときとは大いに異なっている。

The absence of obtrusive and insidious constraints and limits we tend to call freedom. (p. 44)

押しつけがましく油断ならない拘束や制限のない状態を自由と呼ぶ傾向がある。

To sum up: the other side of individualization seems to be the corrosion and slow disintegration of citizenship. (p. 49)

要するに、個人主義化の裏面は、市民権の頽廃とそのゆったりとした解体にもとれる。

パーソナル化の進行による意味変容を簡潔に述べると、初期の解放による自由から、自己再帰性の自由に移行した第2ステージでは、プライベートの優先とパブリックの軽視、ないしはその無視をもたらした。実際、この手のエピソードには事欠かない。極論すると、脱社会化した人間を表現するために、individualization を使用していると考えられる。Personalize や personalization は、同じ個人（主義）化でも、まだ自我構造にパブリックの領域が若干は残存している。しかし、individualization では、パブリックの領域はほとんどなく、プライベートのみが占める。この関連を Bauman は次のように述べる。

The 'public' is colonized by the 'private'; (p.49)

「公」は「私」に蹂躪された。

The 'private' has invaded the meant-to-be-public scene, but not to interact with the 'public'.
(p.205)

「私」が公的にみえる状況に侵入してきたが、「公」と相互作用しているわけではない。

こうして「私」が人格のほとんどを構成する〈カプセル人間〉が誕生する。近代的個人の人間性を Identity と定義するならば、第2段階の〈カプセル人間〉のそれを Identity と称することは当然ながら不適切となる。そこで Bauman は、代わりに、identification を提唱し、この概念こそが、グローバル化時代に適合したものではないかと考える。

Perhaps instead of talking about identities, inherited or acquired, it would be more in keeping with the realities of the globalizing world to speak of *identification*, a never-ending, always incomplete, unfinished and open-ended activity in which we all, by necessity or by choice, are engaged. (p.152)

継承したものでも獲得したものでも、どちらの Identity にせよ、これらについて話すよりも、グローバル世界でのリアリティにより適合的なのは、果てしなく終わりのない、常に未完成で、正解のない活動ではあるが、*identification* について話すことである。

多様化し流動的な社会で統一基準を求めることはたやすいことではなく、その場その場での対応が必要不可欠となる。絶対的な正解があるわけではなく、そこにいたるまでのプロセスを重視することになる。しかも、そこでは迅速な対応が要請される。これらの帰結として、自己責任と自己再帰性が確認されることになる。

In our 'society of individuals' all the messes into which one can get are assumed to be self-made and all the hot water into which one can fall is proclaimed to have been boiled by the hapless failures who have fallen into it. For the good and the bad that fill one's life a person has only himself or herself to thank or to blame. (p.9)

われわれの「諸個人の社会」では、直面する窮地はすべて本人しだいで、陥る困難はすべてそうだったついでにない当人がもたらしたものと見られてしまう。人生を満たす良きことも悪しきことも、ただ本人の自業自得によるところとなってしまう。

The present-day uncertainty is a powerful *individualizing* force. It divides instead of uniting, and since there is no telling who might wake up in what division, the idea of 'common interests'

grows ever more nebulous and in the end becomes incomprehensible. Fears, anxieties and grievances are made in such a way as to be suffered alone. (p.24)

現在の不安定さは、強力な「個人主義化」の影響力による。それは、統合の代わりに細分化をもたらし、どの部分に自分がいるのかもわからなくなり、「共通の利害関心」という考え方も曖昧になる一方である。そして、ついには理解不能となる。不安や心配、それに不幸は、自分ひとりで背負うものとなる。

自己責任、自己再帰性、パーソナル化について、Baumanの基本的考え方を追体験し確認した。パーソナル化も行き過ぎた場合は、過剰な individualization となり、公的領域を看過した単なる私事主義に陥いる。彼は、その危うさに警鐘を鳴らしたが、そのため、論調は若干の冷やかさやペシミズムを感じさせるところとなった。今後、過剰な individualization の克服策を模索することが急務となるだろう。

6. おわりに

こうして近代の第2ステージの諸特徴を整理してみると、われわれはこれらの現状と課題に直面し、好むと好まざるとにかかわらず、ここから逃避することができないことがわかる。たとえば、個人と孤人（自己再帰性から形成される典型的私的自我構造タイプ—西脇）をどのように共存させるのか、両者が混在する集団や組織のモチベーションをどのように向上させるのか…今後もこの問題意識をもち、リアリティのある理論化を考察していきたい。この線上には、中野収氏が第1ステージのコミュニケーション論を止揚して構想された情報メディア論（中野社会学）もその姿をより鮮明に現すと考えられ、この軸にブレがないことを証明できると確信するからである。

第2ステージの社会は、相反する要素をもち、多面的で、つかみどころのない、ソフトなそれ、いわゆる多様化社会である。それだけに逆説的ではあるが、対立を止揚することができれば、魅力ある社会が実現できるかもしれない。ハイブリッド型は閉塞状況を突破する方策の1つである。悲観的空気は払拭したい。また、solid から liquid, 固体化から液体化と進展してきた modernity は、今後さらに、気体化へとシフトするのであろうか。多様性を包摂する気体化した modernity とは、《カプセル社会》をその構成要素とするのであろうか。

社会学は、社会が何らかの危機的状況にあるときに展開してきた。グローバル化にしても環境問題にしても、「そんなの関係ねぇ！」とか「いいんじゃない〜い」と他人事として突き放して済む問題ではない。むしろ反対に、ミクロ的視野が優勢を誇る現在の状況自体が、社会的には、パーソナル化のトレンドを強く受けている証左ということができる。社会学には、マクロ—メゾ—ミクロの連鎖的視座から考察するという特性がある。そのため、マクロに関心が集中するときはあえてミクロから、反対に、ミクロに注目が集まるときはマクロから考察する。第2ステージでは、後者のアプローチがより有効となるだろう。この意味で、社会をマクロ的に、そして相対的に認識する社会学の出番は必ずや来るはずである。当初、孤人へのアプローチが、ほとんどミクロ的なそれであったように。社会学は多少天邪鬼的に見えはするが、いたってバランス感覚を重視するハイブリッド型の方法論を持っている。それ故に、21世紀という多様化とグローバル化を前提とする時代にこそ、その強みを発揮することができるのである。

[近代の第2ステージに関連した参考文献]

- 特集「家族はどうなっているのか?」『世界』No. 684, 岩波書店, 2001
- 三浦朱門・さらだたまこ『父と娘のパラサイト・シングル』ベスト新書, 2001
- 信田さよ子『脱常識の家族づくり』中公新書ラクレ, 2001
- 特集「家族の絆」『文芸春秋』4月臨時増刊号, 2002
- 袖井孝子『日本の住まい変わる家族』ミネルヴァ書房, 2002
- 小関勝則編『わたしたちの名言集 Best 100—70's』ディスカヴァー 21, 2002
- 林道義『家族の復権』中公新書, 2002
- 岩村暢子『変わる家族 変わる食卓』勁草書房, 2003
- 伊田広行『シングル化する日本』洋泉社新書, 2003
- 賀茂美則『家族革命前夜』集英社インターナショナル, 2003
- 酒井順子『負け犬の遠吠え』講談社, 2003
- 小倉千加子『結婚の条件』朝日新聞社, 2003
- イミダス編集部編『新語死語流行語』集英社新書, 2003
- 話題の達人倶楽部編『懐かしの80年代にどっぷりつかると本』青春文庫, 2004
- 堀内圭子『〈快樂消費〉する社会』中公新書, 2004
- 和田秀樹『パラサイト・ダブルならうまくいく!』PHP 研究所, 2004
- 藤原智美『家族を「する」家—「幸せそうに見える家」と「幸せな家」』講談社+α文庫, 2004
- 西川祐子『住まいと家族をめぐる物語—男の家, 女の家, 性別のない部屋』集英社新書, 2004
- 山田昌弘『パラサイト社会のゆくえ』ちくま新書, 2004, 『家族ペット』サンマーク出版, 2004
- 鈴木謙介『カーニヴァル化する社会』講談社現代新書, 2005
- 吉崎達彦『1985年』新潮新書, 2005
- 岩村暢子『〈現代家族〉の誕生—幻想系家族論の死』勁草書房, 2005
- 山田昌弘『迷走する家族—戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣, 2005
- 丸橋賢『退化する若者たち』PHP 新書, 2006
- 都築響一『バブルの肖像』アスペクト, 2006
- 木下幸男『「流行語大賞」を読み解く』生活人新書, 2006
- 死語研究会編『死語大全』彩図社, 2006
- NHK 放送文化研究所世論調査部編『崩食と放食』生活人新書, 2006
- 長友健二+長田美穂『アグネス・ラムのいた時代』中公新書ラクレ, 2007
- 檜原叔子『ハヤリもの50年—昭和32年—平成18年—』こう書房, 2007
- 山田昌弘『少子社会日本—もうひとつの格差のゆくえ』岩波新書, 2007
- 岩村暢子『普通の家族がいちばん怖い』新潮社, 2007
- 産経新聞「食」取材班『亡食の時代』扶桑社新書, 2007
- 松井計『家に帰らない男たち』扶桑社新書, 2008
- 山田昌弘・白河桃子『「婚活」時代』ディスカヴァー携書, 2008
- 高崎真規子『少女たちの性はなぜ空虚になったか』生活人新書, 2008
- 産経新聞取材班『溶けゆく日本人』扶桑社新書, 2008
- 鷲巣力『公共空間としてのコンビニ—進化するシステム 24時間 365日』朝日選書, 2008
- 三浦展・柳内圭雄『女はなぜキャバクラ嬢になりたいのか?』光文社新書, 2008
- 芹沢俊介『若者はなぜ殺すのか—アキハバラ事件が語るもの』小学館 101 新書, 2008
- 吉見俊哉『ポスト戦後社会』岩波新書, 2009

松田美智子『新潟少女監禁事件—密室の 3364 日』朝日文庫, 2009
土井隆義『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット, 2009
水無田^{みなした}気流『無頼化する女たち』洋泉社新書, 2009
芹沢俊介『家族という絆が断たれるとき』批評社, 2009
森綾『「夫婦別寝」の時代』主婦と生活社, 2009
石川結貴『暴走育児—夫の知らない妻と子のスイートホーム』ちくま新書, 2009
三浦展・上野千鶴子『消費社会から格差社会へ—1980 年代からの変容』ちくま文庫, 2010
岩村暢子『家族の勝手でしょ!』新潮社, 2010
春日キスヨ『変わる家族と介護』講談社現代新書, 2010
柏木恵子『親と子の愛情と戦略』講談社現代新書, 2011
高護『歌謡曲—時代を彩った歌たち』岩波新書, 2011
見田宗介『現代社会はどこに向かうか—生きるリアリティの崩壊と再生』弦書房, 2012
速水健朗『都市と消費とディズニーの夢—ショッピングモライゼーションの時代』角川 one テーマ 21, 2012
今柊二『ファミリーレストラン—「外食」の近現代史』光文社新書, 2013
阿部真大『地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新書, 2013
安田賢治『笑うに笑えない大学の惨状』祥伝社新書, 2013
岩村暢子『日本人には二種類いる—1960 年の断層』新潮新書, 2013
北折充隆『迷惑行為はなぜなくなるのか?』光文社新書, 2013
吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣, 2013
浅野智彦『「若者」とは誰か—アイデンティティの 30 年』河出ブックス, 2013
山田昌弘『「家族」難民—生涯未婚率 25% 社会の衝撃』朝日新聞出版, 2014

(にしわき かずひこ 文化創造学科)